



「呼鳥の庭」づくり運動

（提案趣旨）

個人の庭に、餌台を設置する運動を展開する。鳥を愛することで身近な自然への関心を高め、ひいては豊かな環境作りへの意識が高まるだろう。

（本文）

昔から日本には、小鳥を飼って楽しむ習慣がありました。しかし、それは真の愛鳥ではないというので、むしろ今は、「日本野鳥の会」の理念がそうであるように、自然に生きる野鳥を、そのままの姿で親しむ方向に進んでいます。

ただ、少年時代にメジロを追いかけた私の追憶からしますと、飼育が小鳥の理解へ、小鳥が森の、森が、風土の理解へとつながったことも否めませんし、逆に、飼い鳥を一切やらないとなれば、かえって疎遠になって自然との交流そのものを妨げて、無頓着、無関心になりかねません。それはひいては自然への慈しみの気持ちを絶ち、かえって、環境などどうでもいいや、といった思想の萌芽にもつながることが危惧されます。もっと自然が身近であることが大切で、そのために、どの家庭にも、小鳥を呼ぶ餌台を作ったらどうでしょうか。それは最も身近な自然との対話の窓口となり、かけがえない慰みともなることでしょう。餌台を庭に置く。餌を与える。それだけのことです。それを、個人の思いつきだけに留めず、ひとつの市町村、いや県ぐるみでやるとなると、大きな潮流が生まれます。餌に鳥が来ない！ ではなぜか？ 鳥が生息する環境、とりわけ、営巣環境を保証した森の消滅…。思考は日本の自然、風土、文明のあり方へと連なり、ひいては日本のあり方へと発展することでしょう。

ここで、二十世紀初頭の世界をリードした二人の人物を紹介します。その魂がどのように、いつ形成されたか、世界を運営するにいかに関与を持ったかに思いをはせていただきたいからです。

アメリカ大統領セオドア・ルーズヴェルト（第 26 代・1901～1909）とイギリスの外相エドワード・グレイ卿が、野鳥の声を聞くために森を探索する話です。

『1910 年 6 月の某日、アメリカ大統領を引退したセオドア・ルーズヴェルトはアフリカ旅行のあとでイギリスにやってきて、外務大臣のグレイ卿とひそかに駅で落ち合い、約 20 時間、二人でぶらぶらとイッチェン川のほとりを散歩したり、休憩したりした。二人は 40 種ほどの野鳥を眺め、20 種ほどの声を聞いて楽しんだ。グレイ卿はルーズヴェルトが知らない鳥の声をたずねるといちいち教えてやったけれど、ルーズヴェルトは一度聞いたら二度と過つことがなく、鳥それぞれの声にあわせて詩を引用してみせたが、その知識の博大さと感性の鋭さに卿はすっかり感服した。しかし、ルーズヴェルトはルーズヴェルトでグレ

イ卿にある自身とおなじ稟質^{ひん}にいたく感銘するところがあった。そうやって二人きりで肩を並べて川岸や森や谷をさまよい歩き、サザンプトンの港までグレイ卿は同行し、アメリカへ帰るルーズヴェルトとそこで別れた。』「フライフィッシング サー・エドワード・グレイ著 TBS ブリタニカ」の開高 健の巻頭言より。

イギリス南部のイッチェン川周辺には美しい森林が昔のまま残っていました。初夏、探鳥には最もよい季節でした。野鳥の愛好家でありオーソリティであった二人…。地球的な世界のリーダーが二日も三日も山にこもり、激動の世界からは一顧だにする必要もなさそうな鳥を探して一喜一憂するのです。胸のすく狩猟でもなく、ただ声や姿を愛でるだけ。繁みに、小鳥に、注がれる二人のまなざしは少年の日のままであったにちがいありません。

【仕掛け】

やりかたは、市民に呼びかければ済む話ですし、もっと広げるためには日本野長の会などの意見を聞きながら、NPO 的な運動にしていけばいいのではないかと考えています。観察の成果の報告会を開催して、鳥の名前を覚えたり、種類の多さを競い、表彰するなど、人の欲望を満たす、多少俗世間的なことも楽しいのではないのでしょうか。一つの村から、県へ、さらに九州沖縄全域がそうなってくればいいが、とまっているところです。

